

定家歌学における『五代簡要』の位置(一) 『奥入』への視座

今 井 明

『五代簡要』は別に『万物部類倭歌抄』とも呼ばれる定家の著した歌学書のひとつで、奥書に拠れば承元三(一二一〇)年までには成立していたらしい。内容は『万葉集』および『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』・『後拾遺集』の各集から歌詞や歌を抄録したものである。『五代簡要』は建保四(一二二六)年に成立する『定家八代抄』と密接な関係が認められる点からその秀歌選的性格や、また作歌技術参考用に編まれたものとする見解あるいは定家が「物」

や「事」を検索する必要性を痛感して編纂したもの、といった指摘がこれまでにもなされているが、本稿(以下続稿において)は次の二つの課題を設けて考察するものである。

I 標記の問題。その書式と特に標記「詞」の問題。

II 『五代簡要』の定家歌論・歌学史上的位置。特に

『奥入』および『頭注密勘』・『僻案抄』との関係。はじめに右のような課題を考察する理由を述べる必要があると思われるので、その説明から本論に入る。

『五代簡要』は左に引くように歌の一部を抄録し、その上に標目を記している。これを標記と呼ぶ。(本文は『日本歌学大系』別巻三の翻刻に拠る。傍線は引用者によるもの。)

万葉集

巻第一

旅、名所 秋野にをばなかりふきやどれりしうちの宮

このかりいほしぞ思〔七〕

雲 渡津海のとよはたくもにいりひさし〔二五〕

雲、名山 みわ山をしかもかくすか雲だにも〔二八〕

萩 そまかたのはやしはじめ さの萩の〔一九〕

村 河上のゆつはのむらに〔二二〕

(中略)

草 道のへのくさふかゆり〔二二五七〕

詞 なほあらじと事なしぐさにいふ事〔二二五

八〕

山、椿 あなし山椿さけれや〔二二六二〕

原 あをみづらゆさみのはらの〔二二八七〕

(後略)

右のような標記は『万葉集』から始まって『古今集』の八六二番歌まで確認することができるが、この標記は定家自身に根拠を持つものなのであろうか。課題Ⅰに関する問題であるが、まずその点を問うてみたい。⁽²⁾

定家関係の資料の中で注目されるのは、次の『奥入』の記事である。

(イ) 『奥入』(第一次) 明融本 (『東海大学蔵桃園文庫影

印叢書 源氏物語(明融本) Ⅰ』一九九〇・東海大

学出版会)

「花の宴

なをあらしに詞 万葉集第七

默然不有 なをあらしと事なしぐさにいふ事を

きゝしれはすくなかりけり」

(ロ) 『奥入』(第一次) 大島本 (池田亀鑑『源氏物語大

成卷七』に拠る。)

「花のえん

なをあらしに詞 万葉集第七

默然不有 なをあらしと事なしぐさにいふ事

をきゝれはすくなかりけり」

(ハ) 『奥入』(第二次) 定家自筆本 (池田亀鑑『源氏物語大成卷七』に拠る。)

(当該記事ナシ)

(ニ) 別本『奥入』(細川文庫本。『在九州国文資料影印叢書11』昭和54・在九州国文資料影印叢書刊行会に拠る。)

「なをあらしに詞

万葉第七

默然不有 なをあらしと事なし

ぐさにいふことをきゝしれらくはすく

なかりけり」

(ホ) 異本 (神宮文庫蔵『源語古抄』。今井源衛『源氏物語の研究』一九六二・未来社に拠る。)

「なをあらしに

万葉七

猶あらしとことなしくさにいふことをきゝしれ
(ママ)
てはすくなかりけり」

(二) の自筆本には当該記事は確認できないが、その他の『奥入』関連資料は『源氏物語』花の宴巻の次の箇所⁽¹⁾の引歌に関するものである。

ふちつほわたりをわりなうしのひてうかゝひありけと
かたらふへきとくちもさしてければうちなけきてなを
あらしに弘徽殿のほそとのにたちよりたまへれば三の
くちあきたり(明融本「花の宴」の該当本文。「花の
宴」・三〇五頁)⁽³⁾

『奥入』が「なをあらし」に併記する「默然不有」は出典である万葉歌の、

默然不有跡 事之名種尔 云言乎 聞知良久波 少可
者有来 (万葉集卷第七・雑歌・一二五八)

とある本文部分(傍線箇所)をそのまま記したものである。

定家歌学における『五代簡要』の位置(一) 『奥入』への視座

定家の見た『源氏釈』は二種類で現存の『源氏釈』とは異なるものであったらしいが、当該の引歌は少なくとも現存の『源氏釈』に見出すことはできない。『異本紫明抄』などにも当該記事は見えない。こうした調査範囲内での推測になるが、この引歌の指摘は定家自身に根拠を持つと判断して問題ないと思われる。(ホ)のみ「詞」という記事が見えないが、それは(ホ)の本文上のくずれとみなされるものであって、明融本のような形式が定家本来の書式と判断すべきであろう。つまり「なをあらしに詞」という書式は定家自身に深く関わるものと判断されるのである。

翻って『五代簡要』の標記(前掲の傍線部分を参照)を確認すると、「詞」という標記は「なほあらじ」の上⁽⁴⁾にあり位置が相違するが、基本的には『五代簡要』の標記と『奥入』の書式は完全に重なるものと見て問題ない。ここから『五代簡要』の標記は定家自身に根拠を持つ、いわば定家の問題意識へと直結しうる書式内容であると位置付けることができる。

さて、右に見たような『五代簡要』と『奥入』との書式の共通性は、次のような二つの問題を提起する。

a 標記「詞」の意義。

b 『五代簡要』と『奥入』との関連性。

まずaの問題すなわち「詞」の意味するところについて

考えてみよう。『五代簡要』・『奥入』に先行する歌学書で「なほあらじ」を取り上げたものに『奥義抄』・『和歌初学抄』がある。

○『奥義抄』二十四古歌詞（『日本歌学大系』第一巻・二五三頁）

「なほあらじ 黙然として不有也。 已上見『萬葉集』」

○『和歌初学抄』由緒詞（『日本歌学大系』第二巻・一八七頁）

「なほあらじ 黙然不有也」

いずれも藤原清輔の著作であるが、定家の標記「詞」はこうした先行の歌学書で指摘された「古歌詞」・「由緒詞」といった概念を含んでいるものとしてあったとひとまずは捉えることができよう。つまり定家の標記「詞」には注意すべき歌学的な知識を含み持つ歌詞としての意義があったと予測されるのである。

ただしここで我々が着目しなければならないのは、定家の関心は『万葉集』にある「詞」という次元にとどまらず、『奥入』に確認できるようにその用例を『源氏物語』にも求めているという点である。ここからbすなわち『五代簡要』と『奥入』との関連性という問題が派生するわけで、この問題は本稿の冒頭に示した課題IIに包摂される内容のものである。

そこで次にbの問題を考えてみたいのであるが、『奥入』での『源氏物語』の引歌の指摘とその書式は『五代簡要』を援用したもの、という可能性が高いであろう。承元三（一二〇九）年には成立していた『五代簡要』を、定家はその晩年に『奥入』を整理する際参看したことは充分ありえたことと思われる⁵⁾。しかし、ここでは問題をそうした次元にとどめず、『五代簡要』の成立時点においてすでに定家は『源氏物語』の引歌としての意義をこの万葉歌に見出していたのではないかということをも併せて考えてみる必要がある、ということなのである。この問題が『五代簡要』の定家歌学における位置を考える際、重要な課題のひとつとなるのである。

そもそも『五代簡要』においてそれぞれの和歌本文の抄録は、いったいどのような観点からなされているのであるうか。具体例をあげて見てみよう。『古今集』八十一番歌「それをだに思ふ事とてわがやどを見きとないひそ人のきかくに」について『五代簡要』は、

同 みきとないひそ人のきかくに「八一」

と抄録する。標記は「同」とあるが、前の標記を承けたもので「詞」の意である。ところで定家がこの古今集歌の当該部分に注目する理由は何か。まず注意すべきは「詞」の意味するところであろう。その点については『頭注密勘』

が手掛かりを与えてくれる。

それをだにおもふ事とて我宿をみきとないひそ人のきかくに（八一）

人のきかくには、人のきくにと云也。さむきにと云詞を、さむけくにと云、きくにと云詞をきかくにと云、うきにと云をうけくにと云體の詞也。うけく、つらけくなどもよめり。みつともいはじ、同心也。

きかくの詞、春歌に文字そふる事は注付き。

（『日本歌学大系』別巻五・二四五頁）

と『顕注密勘』にはある。『顕注密勘』が示す「きかくの詞」という関心の在り方と『五代簡要』の標記「詞」とは重なる問題意識であろう。このことは、定家の『五代簡要』には『顕注密勘』において書記される内容と同様の問題意識がすでにあった、ということを示している。

標記「詞」の問題は一応解決したとしても、しかしなお疑問として残るのは『五代簡要』が「人のきかくに」に上接する「みきとないひそ」をも抄録している点である。この本文部分を積極的に取り上げた定家以前の歌学書や注釈書は管見には入らない。

一方、定家関係の資料の中では『奥入』・『定家小本』がこの本文部分に強い関心を払っている痕跡を見出すこと

定家歌学における『五代簡要』の位置（一）『奥入』への視座

ができる。『奥入』・『定家小本』は『源氏釈』が帚木卷「いまはみきとなかけそとておもへるさま」（九七頁）の引歌としてあげる（『源氏釈』の引用物語本文は「みよとなかけそ」）、

それをゝに思ことゝてわかやとをみよとなかけそ人のきかくに

という歌を継承するものであるらしいが、『奥入』は

それをたに思事とてわかやとを見きとなかけそ人のきかくに

という歌本文で載せてあり、『定家小本』は

これをたにおもふことゝてわかやとをみきとなかけそ人のきかくに

とあって、「みきとなかけそ」の右肩に朱点を掛ける⁽⁶⁾。

これらの歌はいま問題としている古今集歌の「みきとないひそ」の本文とは異同があるのであるが、しかしだからこそ定家にはこの部分を抄録しておく必要があったのではなからうか。すなわち『顕注密勘』で取り上げられる「きかく」の「詞」だけでなく、『定家小本』などが高い関心を払う「みきとなかけそ」、『古今集』では「みきとないひそ」とある本文をも『五代簡要』が抄録する背後には、『源氏物語』の引歌の存在を念頭に置いた定家の作業があったのではなからうか。こうした点を視野に入れて問題を敷

衍する必要があると思われるのである。このことがすなわち課題Ⅱを考察する所以である。

右に見てきたように、『五代簡要』は後に著される定家の『頭注密勘』・『奥入』との関連性を窺わせる内容を含んでいるのであるが、ここでは特に『奥入』と『五代簡要』との関係を概括しておきたいと思う。なお、『五代簡要』と密接な関係にある『定家八代抄』をも参考資料としてその関係を調べてみる。調査の方法としては未詳歌や『古今和歌六帖』のみに所載される歌ならびに私家集所載歌を除き、

A 『源氏積』にあるが『奥入』にはない歌

B 『源氏積』になく『奥入』にある歌

C 『源氏積』にあり『奥入』にもある歌

の三つに分けて『五代簡要』および『定家八代抄』の収載状況を整理する。(Cについては対象となる歌数が多いので、続稿において報告する。なお、Aは『源氏積』に掲載されている歌のうち『奥入』中のどこにも認められない歌をいう。従って『源氏物語』の巻毎の引歌の問題とは視点が異なる。Bも同様に、『奥入』に掲載されている歌のうち『源氏積』に認められる歌を除いたものをいう。)

A 『源氏積』にあり『奥入』にない歌のうち、

(1)

『五代簡要』にありかつ『定家八代抄』にある歌(二三首)。

山のはにいさよふ月をいてんかとまちてゝおるに夜そふけにける(万葉集・一〇七一)

伊勢のあまのあさなゆふなにかつくてふあはひのかひのかたおもひして(万葉集・二七九八)

梅枝にきあるうくひすはるかけてなけともいた雪はふりつゝ(古今集・五)

我せこかころものすそを吹返しうらさひしかる秋はきにけり(古今集・一七一)

いてわれを人なとかめそおほふねのゆたのたゆるにものおもふころ(古今集・五〇八)

たねしあれはいはにも松はをいにけりこひをしこひはあはさらめやは(古今集・五一二)

わか恋はゆくえもしらすはてもなしあふをかきりと思はかりそ(古今集・六一一)

いにしへになをたちかへるこゝろかな恋しきことにもものわすれせて(古今集・七三四)

むらさきのひととゆへにむさしのゝのをむつましみあはれとおもふ(古今集・八六七)

わか身からうき世中をなかつゝ人のためさへかなしかりけり(古今集・九六〇)

これをみよ人もとかめぬ恋すとてねをなくむしのなれるすかたを（後撰集・七九四）

あか月のなからましかはしら露のおきてわひしものはおもはきわかれせましや（後撰集・八六三、拾遺集・七一一）

やまてらの入あひのかねのこゑことにけふもくれぬときくそかなしき（拾遺集・一三二九）

(2) 『五代簡要』にあるが、『定家八代抄』にはない歌（五首）。

春の野にすみれつみにとこし我は野をなつかしみ一夜ねにけり（万葉集・一四二四）

梅の花たちよるはかりありしかと人のとかむる香こそしみぬる（古今集・三五）

やまさとは草はのつゆもしけからんみのしろ衣たえすさえきよ（後撰集・一三五五）

ほととぎすおちかへりなけうなひこかうちたれかみの五月雨のころ（拾遺集・一一六）

てにむすふみつにやとれる月かけのあるかなきかのよにこそありけれ（拾遺集・一三二二）

(3) 『五代簡要』にはないが、『定家八代抄』にある歌（二首）。

えそしらぬよし心みよいのちあらは我やわするゝ

定家歌学における『五代簡要』の位置(一) 『奥入』への視座

人やとはぬと（古今集・三七七）

夏くれはやとにふすふるかやり火のいつまでわか身したもえにせん（古今集・五〇〇）

(4) 『五代簡要』・『定家八代抄』どちらにもない歌（二首）。

もゝ草のひもとくあきのゆふくれにおもひたはれん人なとかめそ（古今集・二四六）

みる人もなくてちりぬるをくやまのもみちは夜のにしきなりけり（古今集・二九七）

B 『源氏釈』になく『奥入』にある歌のうち、

(1) 『五代簡要』にありかつ『定家八代抄』にある歌（九首）。

さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりなむのちのかたみに（古今集・六六）

さ月まつ花たちはなのかをかけは（むかしの人のそてのかそする）（古今集・一三九）

さとはあれて人はふりにしやとなれやにはもまかきも秋のゝらなる（古今集・二四八）

わかそのゝ梅のほつえにうくひすのねになきぬへきこひもするかな（古今集・四九八）

宮きのゝもとあらのはきつゆをゝもみ風をま

つこときみをこそまで（古今集・六九四）

いかならむいはほのなかにすまはかは（世の憂き事の聞こえこそさらむ）（古今集・九五二）

（筑波峯の）峯のみみちはおちつもり（しるもしらぬもなへてかなしも）（古今集・一〇九六）

おもひつゝねなくにあくる冬の夜はそてのこほりのとけすもあるかな（後撰集・四八二）

わかやとゝたのむよしのにきみしいらはおなし
かさしをさしこそはせめ（後撰集・八一〇）

（2）

『五代簡要』にあるが、『定家八代抄』にはない歌（七首）。

なをあらしと事なくさにいふ事をきゝしれは
すくなかりけり（万葉集・一二五八）

紅のこそめの衣したにきてうへにとりきはしる
からむかも（万葉集・一三二三）

かすしらすきみかよはひをのはへつゝなたゝる
やとのつゆとならなむ（後撰集・三九四）

なにゝきく色そめかへしにほふらむ花もてはや
すきみもこなくに（後撰集・四〇〇）

いろならはうつるはかりもそめてましおもふ心
をしる人のなさ（後撰集・六三二、拾遺集・六

二三）

人しれす身はいそけとも年をへてなとこえかた
きあふさかのせき（後撰集・七三二）

あらたまの年立帰朝よりまたるゝ物はうくひす
のこゑ（拾遺集・五）

（3）

『五代簡要』にはないが、『定家八代抄』にある歌（四首）。

ちはやふる神のいか木もこえぬへしいまはわか
身のおしけくもなし（万葉集・二六六三、拾遺
集・九二四）

いのちたに心になふ物ならはなにかは人をう
らみしもせむ（古今集・三八七）

おほぬさとなにこそたてれなかれてもつるによ
るせはありといふ物を（古今集・七〇七）

法華経をわかえし事はたきゝこりなつみ水くみ
つかへてそえし（拾遺集・一三四六）

（4）

『五代簡要』・『定家八代抄』どちらにもない歌（八首）。

にほとりのおきなかゝはゝたえぬともきみにか
たらふことつきめやは（万葉集・四四五八）

秋をゝきて時こそありけれきくの花うつろふか
らにいろのまされば（古今集・二七九）

今こそあれ我も昔はおとこ山さかゆく時もあり

こし物を（古今集・八八九）

我をおもふ人をおもはぬむくひにやわかおもふ
人のわれを思はぬ（古今集・一〇四一）

夢とこそ思へけれとおほつかなねぬに見しかは
わきそかねつる（後撰集・七一五）

夏の夜はうらしまのこかはこなれやはかなくあ
けてくやしかるらむ（拾遺集・一二二）

山さくらみにゆく道をへたつれはかすみも人の
心なるへし（後拾遺集・七八）

いはぬまをつゝみしほとにくちなしの色にや見
えし山吹の花（後拾遺集・一〇九四）

C 『源氏釈』にあり『奥入』にもある歌のうち、

(1) 『五代簡要』にある歌は『定家八代抄』にもある
のが基本的傾向であること。

(2) 『五代簡要』にない歌は『定家八代抄』にもない
のが基本的傾向であること。

右のように概括したものをさらにこまかく分析・整理し
ていく作業が必要であるが、本稿ではAとBを取り上げて、
問題の輪郭を描いてみたい。なお、Cについては対象とな
る歌数が多いので、続稿において報告する。

定家歌学における『五代簡要』の位置(一) 『奥入』への視座

Aの『源氏釈』にあった引歌で『奥入』が除いた歌二二
首のうち一八首は『五代簡要』にあること、『定家八代抄』
を含めば定家の関心の埒外に置かれた歌は二首（Aの4）
ということになる。つまり『奥入』が除いた『源氏釈』の
引歌は未詳歌や『古今和歌六帖』・私家集所載の歌以外は
ほぼすべて『五代簡要』にあること、いわば『五代簡要』
の中に『源氏釈』の引歌はストックされているということ
になる。

Aの(1)に該当する例をあげると、『源氏釈』が夕顔
巻「いさよふ月に、ゆくりなくあくかれんことを」（一四
二頁）という箇所引歌とした

山のはにいさよふ月をいてんかとまちてゝおるに夜そ
ふけにける

という歌を『奥入』は除いている。当該歌は『万葉集』一
〇七一番歌に見えるが、『奥入』には掲載されていない歌
である。ところで、『五代簡要』は当該万葉歌を次のよう
に抄録する。

月 いさよふ月 夜深 二首〔一〇七一〕

また『五代簡要』は「いさよふ月」という歌詞を『万葉
集』からこの他に二箇所抄録する。

月 山のはにいさよふ月〔三九三〕

月 山のはにいさよふ月の よはふけにつゝ〔一一〇〕

では、何故定家は執拗にこうした用例を抄録したのであろうか。鬼東隆昭は『奥入』での当該万葉歌除棄の理由を「『いさよふ月』の語は一致するもののそれ以上にこの歌がかゝわっているようには思えない。この類の目についたものをば定家は除いたと思われる。」と推測しているが、定家が除棄した根拠には『五代簡要』の右のような作業が背後にあったと想定することはできないであろうか。『源氏釈』が指摘する歌は「いさよふ月」という歌詞をもった固有の歌ではない。他にも同一の歌詞の詠み込まれた歌が存在するということが確認できその関係性が稀薄となれば、特に『源氏物語』の引歌として当該歌を認定する積極的な理由はないであろう。『奥入』での除棄の根拠にはこうした『五代簡要』の抄録結果があったと推測されるのであるが、重要なのは後年『顕注密勘』（『日本歌学大系』別巻五・二二九頁参照）に書記化される問題にとどまらず、『源氏物語』の引歌として適切であるかどうかを確認しようとする問題意識がすでに定家の内部に胚胎していたからこそ、こうした抄録が『五代簡要』においてなされているのではないか、と思われる点である。そうした作業こそ定家の『五代簡要』編纂の目的のひとつだったのではなからうか。Bの（4）すなわち『源氏釈』になく『奥入』にある歌

で、『五代簡要』および『定家八代抄』にもない歌は『五代簡要』の位置を想定する際、特に重要な意義を持つであろう。『奥入』との関係から言えば、それは『五代簡要』の限界を示すものと認定されるからである。

『奥入』に掲載される『源氏物語』の引歌と定家の実作とが緊密な連関関係を持つことはすでに伊東祐子の指摘したところである。⁽⁹⁾そうした性格を持つ定家の歌のひとつに、氷ゐておきなか河のたえしよりかよひしにほの跡をみぬかな（拾遺愚草・一四四一）⁽¹⁰⁾

という貞永元（一二三二）年の『関白左大臣家百首』での歌がある。伊東の指摘のとおり、この定家歌は『奥入』が夕顔巻「おきなかゝはと、ちきり給ふよりほかの事なし」（一四三頁）の引歌として載せる

にはとりのおきなかゝはゝたえぬともきみにかたらふことつきめやは

を下敷として詠まれたものと考えられるのであるが、右の歌は『万葉集』の四四五八番歌にも見える。

ところで、定家はこの『万葉集』の歌を『五代簡要』には抄録していない。『五代簡要』は名所・地名に対しても高い関心を払っていることが明らかであるが、「おきなか河」という歌枕を含むこの万葉歌は同書には抄録されていないのである。つまり定家がこの万葉歌に着目した痕跡が

見出せないのである。このことは承元三（一二〇九）年の時点においては当該の万葉歌、就中「おきなか河」という歌枕に対して定家がいまだその積極的な意義を見出すに至ってはいなかったということを示していよう。

この事を、先に述べたような『五代簡要』の中に『奥入』と重なる定家の問題意識があったということを前提にして『五代簡要』の側から捉えなおせば、定家は「おきなか河」歌の『源氏物語』の引歌としての意義を承元三（一二〇九）年の時点ではいまだ見出していなかったのではないか、ということになる。とすれば、『奥入』での『源氏物語』の引歌「おきなか河」歌の指摘は『五代簡要』の成立した承元三（一二〇九）年以降、そうした漠然とした期間を想定するよりむしろ『関白左大臣家百首』の詠まれた貞永元（一二三二）年頃の定家晩年の『源氏物語』読解の整理を背景とした事情を窺わせるものとなるのではなからうか。これがすなわち『五代簡要』の限界性という問題の輪郭である⁽¹⁾。

本稿では『五代簡要』の標記の書式に関する問題をはじめに取り上げ、それが定家自身に根拠を持つ書式であることを指摘した。その証跡を『奥入』の引歌の記事に求めたが、さらにそこから問題を敷衍して『五代簡要』と『奥入』との関係に論を進め、その問題の輪郭を描いてみた。ただ

し、そもそも『五代簡要』と『奥入』とはひとつの関係性の中で考察を加えることが妥当であるのか、という問題はあらためて問われるべきであろう。そうした点にも自覚的でありたいと思っているが、紙数も尽きたので以下の考察は続稿に譲ることとする。

注

(1) 藤平春男『新古今歌風の形成』IIの二「『定家八代抄』と『近代秀歌』」（昭和44・明治書院）。久保田淳『中世和歌史の研究』所収「藤原定家における『物』と『事』——『万物部類倭歌抄』を中心として」（平成5・明治書院）。なお拙稿「本歌取りと本歌取りされる詞」（『国学院雑誌』第九十五卷第十一号、平成6年11月）では『五代簡要』に対する稿者の基本的な関心の方向性について報告した。

(2) 以下本稿において引用する和歌の番号は、特にことわらない限り旧国歌大観番号を用いた。これは本稿が基本テキストとして用いた『日本歌学大系』所収の『五代簡要』（『万物部類倭歌抄』）がすべて旧国歌大観番号によって出典を示す方法を採用しており、本稿で引用した歌の所在を確認するには、同番号を用いた方が利便性が高まると思われるからである。

(3) 本稿では『源氏物語』の該当本文の所在を日本古典文学大系本（岩波書店）の頁数によって示した。

(4) 岩坪健「『奥入』成立の諸問題——第一次・第二次『奥入』の関係——」（『源氏物語の探求・第十輯』昭和60・風間書房）

(5) 『奥入』の成立時期については、いまのところ自筆本に「非人桑門明静」とある定家の署名から定家が出家した天福元（一

一三三）年十月十一日以降にまとめられたものであろうという以上の事は分らない。

(6) 『源氏積』は前田家本『源氏積』の歌本文を引用。『奥入』は自筆本の歌本文を引用。『定家小本』は『源氏物語とその影響研究と資料』(昭和53・武蔵野書院)の翻刻本文を引用。なお、『定家小本』については、村上さやか『定家小本』和歌の部をめぐって——『古今六帖』と『新勅撰集』、『奥入』との接点をめぐって——『国語と国文学』平成6年6月号)参照。

(7) この調査は鬼束隆昭『源氏積』と『奥入』(四)——引歌をめぐって——(『日本文学ノート』第十八号、昭和58年2月)を基礎としている。従って、『源氏積』の引歌という概念も同論文の範囲内のもので、基本的には現存の前田家本『源氏積』の引歌を指す。なお前田家本『源氏積』にある歌はその本文に拠り、『源氏或抄物』にある歌はその本文に拠った。『奥入』は自筆本の本文に拠り、『万葉集』一二五八番歌のみ明融本に拠った。また伊井春樹編『源氏物語引歌索引』(昭和52・笠間書院)、渋谷虎雄『古文獻所収万葉和歌集成総索引』(昭和63・桜楓社)および田坂憲二編『源氏積諸本集成』(一九八七年・権歌書房)に負うところが大きい。

(8) 注(7)に引く鬼束論文参照。

(9) 伊東祐子『奥入』掲載歌と『新勅撰集』について(『国語と国文学』昭和60年4月号)参照。

(10) 『新編国歌大観』第三巻所収。番号は同書のもの。

(11) 日本歌学大系の底本(志香須賀本)は『古今名所』とともに『源氏名所』を付載する。「おきなか河」は『源氏名所』に掲載されているが、『源氏名所』の付載は『五代簡要』成立時とは異なる後の付加と思われるので、本稿では考察の対象から外

した。ただし、『源氏名所』が『五代簡要』に付載されるという書誌的な問題からあらためて『五代簡要』の『源氏物語』との関連性を問うことはできよう。しかし、この点は『五代簡要』の本来の問題とは切り離して考察されるべきものと思われるので、本稿では問題から除くことにした。

(付記)

本稿は和歌文学会第五七回関西例会(一九九五年四月二三日、於相愛女子短期大学)での口頭発表「『五代簡要』についての一考察」に基づいているが、稿の進め方の都合から内容を変更した点がある。ご了承願いたい。